



由布市出身。狭間中学校で陸上を始め、大分西高等学校時代には5000mで全国高校総体に出場。青山学院大学では2・4年時に全日本大学駅伝に出場。現在はGMOインターネットに所属し、長距離選手として駅伝・マラソンで活躍。オリンピック出場を目指す26歳。



勝負するなら地元大分で

県立大分西高等学校卒  
第68回大会日本人2着・総合5位入賞

橋本峻



毎日新聞社提供

大分が語る  
日本三大クラシックレース  
別府大分毎日  
マラソン大会



本人提供

名前を呼ばれた瞬間  
第32回・第36回大会優勝  
大分陸上競技協会記録部長  
西村義弘



毎日新聞社撮影、本人提供

「西村頑張れー!!と名前を呼ばれる声援は本当にうれしかった」。

マラソンの応援ではナンバーカードと呼ばれることが大半ですが、個人名で呼んでもらえる別大は、いかにも地元の人々という温かさがあり、地元の人々に選手として認知されていると感じた西村義弘氏。別大は、特別な感慨を持って臨んでいたレースだと振り返ります。

新日鐵大分陸上部(当時)に属し、競技人生13年間に出走したマラソンは40回。うち11回は地元開催のこの大会で、83年の第32回大会(2時間13分55秒)と87年の第36回大会(2時間12分3秒)の2度の優勝を記録。



今夏開催の東京2020オリンピックを前に、日本のマラソンシーンでは熾烈な椅子取りゲームが繰り広げられています。オリンピック代表の椅子は男女各3席。2017年8月、19年3月までの指定されたレースで出場権を得た者だけが出走できる昨年9月のマラソングラ

「別大の鉄人」と言っても過言ではないマラソン選手です。初優勝前年の82年はボブ・ホッジ(アメリカ)に7秒差で、優勝翌年の84年はコール・フリント(オランダ)に21秒差での惜敗。どちらもゴール寸前で追い抜かれました。

「初めての2位の時は大分県選手の入賞が久しぶりでしたので、皆に喜んでもらえたんです。2度目は優勝の翌年でしたが、2度目は優勝の翌年でしたから、散々に言われましたね(笑)」。

そんな西村氏が陸上競技と出会ったのは中学1年の時。「恩師に声を掛けてもらったのがきっかけ。それがなかったら、今の自分はなかったでしょう」。



「長距離は自分の努力が報われる競技で、自分の頑張りが記録に素直に出ます。縁あってマラソンを始めた皆さん全員に、長く続けてもらいたいですね」と語る西村さん。決して途中で立ち止まらない西村さんのマラソン人生はまだまだ続きます。

中学から高校、社会人になった後も、とにかく「しがみついていた」と振り返る西村氏に、その原動力を聞いてみました。「とにかくマラソンが好きだからでしょう」。

常にイーブンペースを守り、30kmから勝機をうかがうレース運びを信条に、完走の美学を貫いた現役時代。引退後も後輩たちの指導に取り組み、この競技との関わりを継続した50余年。夢はもっと多くの人たちに別大を走ってもらいたいということ。座右の銘である「率先垂範」で後世に続く競技者のために今なお尽力し続けています。

※率先垂範：人に先立って模範を示すこと

ンドチャンピオンシップ(以降MGC)の成績で、それぞれ2人の代表選手が決まりました。さらに、男子はMGCファイナルチャレンジとなる昨年12月の福岡国際、今年の3月に行われる東京とびわ湖毎日で、日本最高記録を塗り替えた者が残り1席に確定します。

昨年、別大はMGCシリーズ対象レースに指定され、オリンピックを目指す男子選手たちがしのぎを削る場となりました。「前回のレースの疲労も残っているの、3月の東京マラソンに照準を合わせた方がいいと言われていたんですが、僕自身が地元で勝負しなかったことで別大に出ました」と橋本峻選手。

18年12月の福岡国際からわずか2カ月の短期間での調整にも関わらず、地元の声援を味方につけたいという思いで、19年2月の第68回大会を選びました。「スタート前はMGCを意識していましたが、レース中は目前に同期の二岡康平選手(中電工)がいたので、彼に勝つことばかり考えていました」。

日本人1着を狙えるこのレースをものにしようと、タイム以上に目前のライバルを意識したそうです。わずか14秒差で二岡選手に及ばずながら、自己ベストの2時間9分29秒で日本人2着の5位となり、MGCの出場権を見事手中に収めました。19年9月開催のMGCスター

ト前の心境を「一人でも抜いてやろうという気持ちが強かった」と語った橋本峻選手。暑さは得意と挑んだレースで健闘を見せ、国内の実力者が揃う中、2時間12分7秒で5位になりました。首位中村匠吾選手(富士通)に39秒、2位の服部勇馬選手(トヨタ自動車)に31秒及ばず、オリンピック出場が遠のいた悔しさと同時に、今の自分を出し切ることで新たな自信も得たようです。

「21年のアメリカ世界選手権の代表権を勝ち取って、24年のパリでは必ずメダルを」と、固い決意を語る橋本峻選手に、地元大分からエールを送りましょう!